

市街地から遠望する 郊外という通常の視線を逆にした発想は新鮮である。黄金色はここでは光の色であり、元気な街の象徴でもある。湾岸景観が色変化の時間軸で活写され、景観という視覚の楽しみが素直に伝わってくる。(選考委員 永崎 明子)

能古島からながめる 福岡市街は黄金色



深める。そして街並みのシルエットの後の山から後光を放して太陽は、少しずつ顔を露出して空に向かって昇り始める。その中の一本の光は、山を越え、建物をこえて海の中を突っ走って来て、能古の我が家へと橋が架かる。キラキラと輝いた帯の橋は、最初は細い線であるけれど、太陽が昇るにつれて中を広げてとまる。その橋は本当に黄金色です。それはそれはとても美しく渡れる

主人の長年の夢で、能古島に、この夏我が家を作りました。晴れた日、能古島から眺める福岡市街は、黄金色から始まり、黄金色で一日は終わります。夜明け前の海鳴りと暗闇の静けさの中に朝やけが始まる。若杉山から立花山のあたりから、うっすらと空が色づいてきて、ピンクかかった黄金色である。青空の中、雲が少しばかりたなびけば、空高く雲を

ものなら渡りたい。そして能古の一日は始まっていく。

夕方になると、太陽は我が家のすぐ後の裏山に少し早めだけと姿を消します。空はまだ明るいけど次第に能古の、島影が弧を描くように海をこえて帯状に福岡市街を照らし出す。そこへ能古の西側の海を光の板を敷いた様に辺り一面を照らし、福岡タワー、シーホークホテル、福岡ドームと少し赤みを帯びた黄金色だけ、みんなに見せたい、見て下さい、と言いたげに海も建物も輝いている。そして日暮となり福岡市街地や観覧車は、電燈の光へと変わり、その街並みのシルエットは華やかな黄金色で海を前にして弧を描いている。夜景を眺めているだけでも、それはそれは心がいやされます。そして、その光はそれぞれ海に道を作っている。イカ釣り船の漁り火は、少しにぶい黄金色だけ暗闇の中に船に揺れて美しい。これも又道を作っている。空を見れば満天の星、ここから見る星は一段と大きく見えて、黄金色の星が今にもキラキラと輝きながら降りそそいで来そうである。月が出て満月の夜はロマンチックな気分になります。今までドームの近くに住んでいましたが、能古島に家を建てて、船で10分間、乗るだけで光に満ちた自然を味わえることは主人に感謝したい。そして、いつも心に輝きを持ち続けたいものです。



永崎 陽子
福岡市西区

第5回 福岡市景観エッセー選考作品

色で都市を語るとき、すぐに浮かんだのは札幌市。札幌のイメージ色は「白」。時計塔の白、雪の白。

開拓が遅く、歴史が浅く、どんな色にも染まる白。

それじゃ、福岡は何色だろう？道路事情が悪くて雑然としていて、狭い土地にひしめき合う建築物、固い色豊かな人たち。アジア色だと思つた。

でもアジアという言葉は限定するにはあまりにも広すぎる。

そう、福岡は多彩色なのだ。

海の青、山の緑、土の茶、といった自然色と、都市の中の建物、車、人の色。それだけじゃない。

福岡にはプロ野球があつて、サッカーがあつて、相撲がある。

オーケストラもある、歌舞伎もある、ミュージカルもある。

芸能人や作家も出ている。

スポーツの色、文化の色、芸術の色。そんな多彩色の色が混じって、福岡という都市を彩っている。

その彩りは、たくさん絵の具を使つて、自分で色を作つたりして、白い紙に

いっばいに塗つていく楽しさに似ている。

福岡に住んでいたら、他の都市では見ることのない、微妙で絶妙な色を見ることが出来る。

そんな多彩色のこの都市が私は好きだ。



小松 ゆか
福岡市博多区

人々が都会に集まるのは、英知に様々な選択の機会があるからであろう。勿論、市民は、選ぶ楽しみを享受すると同時に選択する義務を負うことにもなる。本エッセーのように福岡の街中には様々な色がちりばめられており、さしずめ色の玉手箱であろうか。作品は、その玉手箱の中から、「微妙で絶妙な」風合い、色合いの都市景観を創り出す為に、何色を選ぶかという市民の義務を暗示しているようにも思える。(選考委員 岡本 均)

多彩色の輝き